
日本の手織機 便り

2005年7月

第6号



「日本の手織機便り」第4号で東京都八王子を紹介しましたが、八王子に限らず東京西部は養蚕・織物が盛んだった地域で手織機資料も多数残されています。今回は「村山大島」に関連する情報を紹介します。

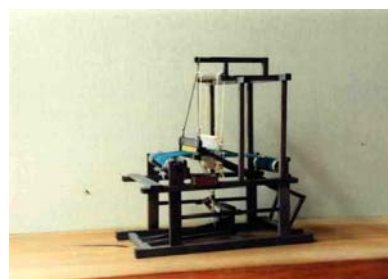
手織機情報紹介

村山大島高機 東京都西多摩郡瑞穂町 瑞穂町郷土資料館所蔵

武蔵村山地方の織物は狭山丘陵南麓の養蚕業とともに発展した。江戸～明治期には綿緋織物・絹織物を作り、大正中期に伊勢崎から板締緋を学んで村山大島が誕生した。昭和42年

(1967)、東京都指定無形文化財に指定され、昭和50年(1975)、通商産業大臣より伝統的工芸品の指定を受けた。

この高機は現在は展示しておらず、箆、綜統を取り外した状態で収蔵されている。—主査・野口英雄氏より—



重松模型

村山大島の板締緋の手法

1. 平板にスジ彫刻をほどこし、同じ面を合わせてその間に糸を巻きつける。



2. 板の隙間に染料を流し込み、両側からプレスする。



3. 縞模様の緋糸ができる。

(繊維博物館所蔵：村山織物協同組合より寄贈されたもの)



小金井市と繊維博物館の連携

繊維博物館がある東京都小金井市は江戸時代から名勝「小金井桜」で知られ、今でもお花見シーズンには大勢の人で賑わいます。大正初期から養蚕が盛んになりました。東京農工大学工学部の前身東京高等蚕糸学校は昭和15年（1940年）に都内から小金井に移転しましたが、当時は学校内外一面の桑畑であったそうです。現在では養蚕農家も姿を消し、製糸工場もなくなり住宅地に変貌を遂げています。所々に見られる桑の木が昔を思い出させます。

小金井市の文化財センターには養蚕・機織なども展示されていますが、小金井市教育委員会と繊維博物館が共同で取り組んでいる手織機の修復について述べます。



小林清親：小金井さくら
(繊維博物館所蔵)

小金井市の文化財センターには以前寄贈された村山型の高機がありました。このたび小金井市教育委員会文化財係の伊藤さんと文化財センターの多田さんの努力で修復することができました。



東京西部に多い村山型高機。繊維博物館にも数台あり、繊維博物館サークル活動などに利用されています。



最近^{そうこう}は修復といっても、綜統は金属製の既製品を使うことが多いですが、糸綜統まで手作りしました。

先ごろ小金井市出身の方から、以前島根県で織物を勉強していた際入手した手織機2台が文化財センターに寄贈されました。その2台は偶然にも、重松模型にある鳥取県弓ヶ浜地方の高機と、島根県の安来織の高機（手織機便り第1号で紹介）でした。重松模型と重松氏が残された製図を参考にしてこの2台を修復し、文化財センターで手織りの体験教室を開くことが目標です。

日本の手織機便り 第6号

発行 東京都小金井市中町2-24-16 東京農工大学工学部附属繊維博物館 田中鶴代

発行日 平成17年7月15日

繊維博物館URL：<http://www.tuat.ac.jp/~museum>

カットは芳員：蚕やしない草九・十（繊維博物館所蔵）